

# 東京未来ビジョン懇談会メンバーによる 知事との意見交換

---

令和元年 11 月 19 日（火）

## — 議事概要 —

※ この議事概要は要旨であり、文言を正確に再現したものではありません。

東京未来ビジョン懇談会メンバーによる知事との意見交換

令和元11月19日

【政策企画局】 それでは続きまして、未来の東京について意見交換させていただければと思います。座長の知事、よろしくお願いします。

【小池知事】 皆さんおはようございます。座ったままでごめんなさい。

さあ、去年の4月まで皆さんにはしばしば東京都庁へお越しいただいて、未来の東京について語り合っていました。ということで、皆さんからいただいたさまざまなアイデアがありましたが、それらを含めまして、長期戦略の中に皆さんの夢も組み込んで、そしてこちらに「未来の東京への論点」という冊子がありますけれども、こちらのほうに盛り込ませていただきました。

それから、御承知のように、「21世紀の豫言」というのは、(資料を広げながら)こちらのとてもすてきなパンフレットにさせていただいて、皆さんの考え方、夢、希望、そういったことを書いていただきました。

今日は久しぶりにこうやって皆さんにお集まりいただいていますので、ちょっとその辺のところも御披露したいと思ひまして、今日はお声をかけさせていただきました。

また、さっきご覧いただいたバーチャルリアリティといひましようか、VRですけれども、「Tokyo Future Travel Scope」という形で、多くの方にこの双眼鏡を覗いていただいています。この展望室には年間200万人の方、と先ほど申し上げましたけれども、多くの方々に未来と過去を一緒に見ていただいております、皆さんの意見はいろんな意味で生かされているということでもあります。

ちなみに、「未来の東京への論点」を示しながらこちらは結構大胆なことも書いてありまして、皆さんにも大胆な案を出してくださったからこそなんですけれども、例えば合計特殊出生率、要は子供が何人生まれるかという話ですけれども、今は1.23とか、東京は特に低いんですけれども、それを2.07にしましようということは、皆結婚した方々にお話を聞きますと子供さんは二人か三人が欲しいわねという人が圧倒的に多いんですね。

だったら、2という数字は、2.07というのは二人か三人というのを実現というか、落とし込むとそういう数になります。ということで、東京都の意思として、出会いがあって結婚もできて、そして子育てもしやすく仕事もしやすいということがこの2.07の中に全部入っています、思いがね。

それから、平均寿命とか健康寿命について、これはともに90歳を目指しましょうと。もう今さら100歳かもしれませんけれども。それから皆さんの中にも、山を守ったり海を守ったりということで活躍してくださっているメンバーの皆さんいらっしゃいますけれども、自然を取り戻そうという意味で、外堀、あそこボートとかあるじゃないですか、釣り堀があったりとかね。あそこに蛍が飛び交うといいねということで、東京をどうしましょうかといったときに、皆さんが思い描きやすい、そんな幾つかのテーマをこちらのほうに書き込んでありますので、皆さんからすれば、それでも物足りないわというお考えがあるかもしれないので、ぜひこれは皆さんがちょっと目を通していただいて、こんな東京だったらいわというのをちょっとまた皆さんから聞かせていただければと思います。

(モハメド・オマル・アブディン様が入室)

**【小池知事】** アブディンさん、おはようございます。ありがとうございます。きょうはここにピアノがあるんですけど、とてもすてきなピアノで。

**【モハメド・オマル・アブディン様】** 有名なピアノですね。

**【小池知事】** そうなんです。おもいでピアノといいまして、草間彌生さんがすてきにこのようなデザインをしてくださいました。それでは、田口さんどうですか。東京に向けての夢、希望、さらに加えてこんなこともぜひということで、来年、パラリンピックですしね。

**【田口亜希様】** そうですね。もうあつという間にパラリンピックがやってくるんですけども、私はプレゼンテーションをそれぞれしたときに、障害のある人も皆が納税者になれる、働けるような、そんな東京、そして日本にしていきたいということをお伝えしたんですね。

やっぱり2020年の東京が決まって東京都のほうもいろんなバリアフリーというのは進んでいるんですけども、じゃあ全部が来年までにできるかという、やっぱり厳しい部分はたくさんあると思うんです。全部が2020年にできるとは私たちも思っておりません。予算も時期もありますので、ただどのように2020年の後もやっていくかということが大切かなと思いました、自分たちがいろいろかかわらせていただいて。それには、2020年終わってからできてない部分を考えようでは遅いと思うんです。やっぱり2020年のパラリンピックが終わる前までに、2020年パラリンピック以降もどういうふうにしていって、こちら論点の5にも書いてくださっているように、ダイバーシティな、人が輝く東京にするためには2020年以降どうしていくかを、もう今の時点で考えておいてゴール地点を決めておくというのがとても大切だと思います。未来ビジョン懇談会に出させていただいてもう先を見ている、パラで終わりじゃない、2020年で終わりではないので、そういうのは私たちの励みになりますし、私たちもいろんな意見をどんどん言っていきたいと思います。また、多分いろんなテクノロジーが進化していくことによって、見直す部分も絶対あると思うんです。今、バリアフリー、アクセサビリティと思っている部分がやっぱり時代によって変わってくると思うので、そういうのも私たちも勉強していきたいと思いますので、ぜひ一緒に目指させていただければと思います。

**【小池知事】** パラリンピックのマラソンは規定のマラソンコースを通りますから、ぜひここで大きくにぎやかに皆で励まし合いながらすばらしいパラのマラソン大会にしていきたいなと思っています。それを機会に、またいわゆるユニバーサルデザインであるとか、それからアブディンさんのように目の不自由な方でも安心して歩けるような東京、まだまだアブディンさん、もっとこんなところをこうして欲しいってあるでしょう。

**【モハメド・オマル・アブディン様】** そうですね。

**【小池知事】** どんなところが一番不便ですか、東京って。

**【モハメド・オマル・アブディン様】** そうですね、移動に関しては随分改善してはいますけれども、私は以前からやっぱりこのホームドア問題の改善を主張してきました。自分も落ちたことがあるだけに、ずっと言ってきましたけれども、10月にブラインドサッカー

一を教えてくれた恩師が新宿駅でホームから転落して亡くなられたんですけど、やっぱりもう何か言葉を失っちゃいますね。

【小池知事】 ブラインドサッカーを教えていた方ですね。

【モハメド・オマル・アブディン様】 そうですね、最初の日本にブラインドサッカーが渡ってきたときの初代の日本代表の選手で、すごい功労者なんですよ。

【小池知事】 ブラインドサッカーも来年のパラのときに大変人気が出るようにしたいと思いますし、またホームドアのほうも。

【モハメド・オマル・アブディン様】 あとは、やっぱり、ハートのほうですね。ハードだけでなく。例として、障害者のスポーツ施設の利用問題があります。特にスポーツジムですが。多くのスポーツジムは、障害者の一人での利用を認めておらず、利用する際に、介助者の同伴を条件に容認するんですが、結果として、多くの障害者が自由に、家や職場の近くで便利なスポーツ施設を使えずにいます。

東京パラリンピック出場を目指している私も多くのスポーツジムを回ってみたのですが、一人での利用を認める会社は一つもなく、門前払いをくらいつづけました。

せっかくパラリンピックを東京にするのだから、日本の障害者のスポーツ施設へのアクセスを高める契機にしてもらいたいと思います。

【小池知事】 なるほど。ありがとうございます。アブディンさん、スーダン人ですけど、門前払いという言葉を使ってすごいですよね。ありがとうございます。

【モハメド・オマル・アブディン様】 すみません。こういった身近なところでも多くの課題が存在していることに注目してほしいと思って発言しました。

【小池知事】 そうね、ありがとうございます。とてもいい御示唆をいただきました。メイミさん、どうですか。

**【メイミ様】** ちょっとメモしてきました。幾つか考えたんですけど、一つは寝たきりの人がいなくなって、そしてバリアフリー化が不要な東京。というのは段差とか砂利道とか階段、そういった移動がしづらい場所も楽々と移動できるような、例えば車椅子だったりそういった個々の手段が楽になるという、そこら辺の開発ができてくるんじゃないかというようなこともちょっと夢かもしれませんが思いました。

そういったことで、高齢者の方で寝たきりといわれるような状態の方でも、外に出る機会がふえていくと、もうそれは寝たきりではないんじゃないかというような、そんな東京の未来をイメージしました。

まち中の全てをバリアフリー化するとか、そういったことってなかなか大変かなと思うんですけども、そこを補うような形で、個人個人の持っているもののスペックも上がっていくといいかなということを思いました。

あともう一つは、リタイア後、退職後の高齢期も裕福で安心して暮らせるような世界の福祉都市というようなことを想像しました。高齢期になってどう過ごすのかということを選択ができる。働きたいと思う人は働くこともできるし、趣味活動をしたいと思ったりボランティア活動をする人がいたり、まず安定して安心した生活があって、その生活がある上でさらに高齢者の元気なシニアの力が労働力になったりだとかボランティアなんかで社会貢献に生かされたりとか、あとは、安定して心の余裕があるからこそ消費活動とか、そういう経済効果も生み出すというようなことができたらいかなということを思いました。

もう一つは、AIがいろいろ普及されていくと思うんですけども、職業がAIにとられるというような記事とかよく目にしますけど、逆にAIを使って自分のかわりに働いてくれて、それが自分の収入になったりというようなことができたらいかなという願望。

**【小池知事】** 今は分身ロボットとかいろいろありますからね。

**【メイミ様】** 分身、ええ。願望かもしれませんがそんなこと。

あとは、ソフト面で多様性に富んだ東京ということが既に書いてあるんですけども、そこにプラスアルファで、幼児期から多様性を受け入れるというような取り組みや教育とか環境が整っていると、そこから成長していった大人になったときにいきなり多様性ということではなく、小さいうちから交流があるといいのかなということを思いました。

以上です。

【小池知事】 大分ためてきましたね。

青木さん、どうですか。

【青木亮輔様】 はい、ありがとうございます。

そうですね。やはり東京の僕はこの豊かな森林、東京の4割が森林というところはすごく大きなポテンシャルだなというふう感じていまして、今、戦後植えられた木が50年、60年たっていて、これは日本全国ほぼ一緒ですけども、そういった中で、でも東京にやはりそういった森があって、2040年にはそれが樹齢70年、80年、2050年、60年とどんどん木が成長していく、豊かな東京にそういうボリュームがある森がどんどんできてくるというのは、やはりすごく魅力的な都市になるだろうなというふうに思っています。

ただ、やっぱりそこに森があるだけではもったいないという、今の子供たちが大人になったときに、そうやって先代の人たちが植えた木が、やはりその人たちのおかげで豊かな森があってきれいな水があって、そこで山に入ることができて、そういうまちの暮らしの中でハードな生活である意味疲弊した、もしかしたら心、体あるかもしれないですけど、そういったものがきちっと癒せる、そういう空間をきちっと先を見据えて用意しておいてあげるというためにも、森の中にインフラをつくって行って、前にもちょっとお話ししましたけど、本当に美術館とかそういったところに行くような感覚で森の中にふらっと行けるような、何かそういう環境をつくってあげるといいななんて思うんですね。

今回の資料をいただいて「あ、すごい、これはおもしろいな」と思ったのが、世界の都市ランキングで六つの分野がある中で環境の分野だけ低くて29位と、総合では3位なのに、ということはその環境の分野ってまだまだ伸びしろがあるなという。東京がそこを伸ばすことができたら世界に本当に誇れる都市になっていくんだろうなと思うと、何か森をやはりまちのふだんの暮らしと近い状況にこの2040年に向けてやっていけると、今回いただいた資料、森の話ってすごい大事だというふうにかかれているんですけど大体後のほうに書かれているんですよ。でも、やはり森って全ての根源というか、これはきこりが使うおのに実はあらわれているんですけどね。おのって柄があって先に刃がついて、こういう刃がついていますよね。そこには3本の爪と4本の爪の傷がついているんですね。

三つはお神酒をあらわして、木を切る前に木に感謝をするという意味で、立てかけることでお神酒を上げることと一緒になんですけど、その裏には四つの爪が入っているんですね。それは、四つの気と書いて「よき」というんですけども、地水火風って土ですね、いい木をつくるためにはいい土地、土があって、きれいな水があって、お日様があって、きれいな空気がある、その四つがそろっていい木が育つよと。でも、これ人にとって一緒だと思うんですね。なので、やはり今の都市の生活ってそういう四つの気から離れた、どこか離れた、光も例えばこういう建物の中では昼間でも人工の光の中で生活したりとか、そういったところから離れてしまっているんで、何か取り戻すような場という意味でも、やはり森を近しくしてあげるとするのが大事だなというふうに思いますし、2040年には、そういった森の大事さが上のほうに来ている社会になるといいななんて思っています。

【小池知事】 森でというか木材の仕事をする若者って増えていますか。

【青木亮輔様】 総量で言うとそれほど増えてはないですが、若返りが大分進んできています。なので、若い人はどんどん増えていますね。ただ、やはり危険な仕事でハードな仕事というところもあるので、機械化というのはもちろん大事ですし。

【小池知事】 坂ですものね、東京（の山）は特にね。

【青木亮輔様】 そうですね。その辺は介護と一緒に。

【小池知事】 ロボットなんかは無理よね。

【青木亮輔様】 割と東京は山が急峻だったりするので、なかなか機械化が難しいんですけど、ただ、やはり今のAIもそうですし、そういったテクノロジーが進化していますので、どうしても森の林業、木材、そういうのは後回しになってしまって、あって当たり前なので後回しになっちゃっているんで、そういったテクノロジーもほかのところが先に優先されてしまいますけど、そういった森を守るというところも。

【小池知事】 オーストリアとか何かに、そういう何か新しいイノベーションが行われているというので。

【青木亮輔様】 そうですね。ヨーロッパは本当に進んでいますので。

【小池知事】 ええ。

ちょっと市来さんは、これ（『20世紀の預言』）、素敵なのをまとめていただいてありがとうございます。書きそびれた部分とか。

【市来健太郎様】 僕は、2040年いろいろあるんですけど、一言で言うと「世界最高のクリエイティブシティ」に東京になるんじゃないかというふうに思っています。今、皆さん日ごろ感じていらっしゃるように、AIとかIoTとかビッグデータとかコンピューターテーションが進んでいますので、合理化とか最適化とか自動化という波に、我々はさらされています。それが加速度的に進化しているときに、はっきり申し上げると、人間の残された本当の価値とは多分「創造性」なんじゃないかということを考えているんです。創造性による文化発信を考えたとき、多分、東京って世界で今ポールポジションだろうなということを思っていて、それを強く期待しています。

東京の創造性の進化には、大きく3つの衝突があると思っています、一つはまず「伝統と未来の衝突」。伝統ってやっぱりお金で買えなくて、例えば浮世絵に描かれていた江戸の景色が現代によみがえるとか、あと、世界のコンテンツといわれているおすしが進化して、たとえば、2040年のSUSHIってどうなるんだろうと考えると、それだけでもうわくわくしませんか。そういう新しいものと古いものが衝突することでやっぱり新しい魅力が生まれるというのが、まず東京が持っている資産かなと。

二つ目は、やはり「テクノロジーとアートの衝突」。テクノロジーと感性といってもいいと思うんですけど、テクノロジーは日進月歩で進化するじゃないですか。ともすればもう、iPhoneをあけるたびに僕らはすぐこんなアプリをダウンロードしてください、アップデートしてくださいと言われるんですけど、やっぱり僕たちがそのテクノロジーとかアルゴリズムの奴隷にならないようにしなきゃいけない。そのためには、その進化にクリエイティビティを拮抗させなきゃいけない。振り返ってみると、やっぱり漫画とかアニメとか映画とか音楽とか芸能とか建築とか、東京はそのクリエイティビティのコンテンツの山なんです。だから、まさにそのテクノロジーとアートが拮抗することで新しい感動を世界に発信するというのが二つ目の進化の軸じゃないかと。

最後の創造性の進化の軸というのは、やっぱり重要な衝突なんですけど、「日本らしさと

グローバルさの衝突」。これどっちかだとか、いろいろ議論あるんですけど、日本らしさだけだとたこぼ化しちゃうし、グローバルさだけだと均質化しちゃうと。やっぱりそれらが衝突することが、それこそ東京が持っているハブとしての資産ですので、それが大事じゃないかと。

いつも都知事がおっしゃることに僕も賛成で、やっぱり最大の資産は「人」ですよ。第4次産業革命とかSociety 5.0って言い過ぎると、どうしてもそのプログラミングとか、あとデータ解析とか、そういうところに教育が偏重しがちなんですけど、僕はこういう時代こそ「感性中心の人づくりとかものづくり」が大事じゃないかということを考えています。

やっぱりパリとかうまくいっているなと思って、くやしいんです、大好きなんですけど(笑)。パリジャンヌと言うじゃないですか。ニューヨークはニューヨーカーというじゃないですか、世界的に。東京人って言わないですよ。2040年、「TOKYO-JIN」って、文化的な素養とか魅力も含めて、それが世界の言葉になればいいなということを想像しながら、世界最高のクリエイティブシティ東京というのが僕の願いですね。

【小池知事】 ありがとうございます。

アーティスト、菊地さん。

【菊地裕介様】 そうですね、やっぱり市来さんと同じアーティストではあるんですが、だから結構ダブる部分があったんですけども、僕の場合はもうちょっとパーソナルな領域にいそれを落とし込んでお話しできればと思うんですが、実は私自身も昨年結婚しまして、今年子供が生まれまして。この1年半の間に大きな変化があっているんな見え方が変わってきたんですけども、その間、世の中でもいろんなことが実現して、このおもいでピアノも僕がそういうのもあったらいいなと思っていたことが実現したわけですし、今、結構そのムーブメントが日本中広がってしまっていて、いろんなところに、公共空間にストリートピアノがあって、そういうものを利用して若者たちがいろんな発信をしていると。それはもちろん玉石混交で、いろいろ僕らとしては思うところもあるんですが、でもそのときに同時に気づいたのは、自分自身も、今まで自分は若者だと思っていたけれども、だんだんそうでもない中間の世代になってきたから、やっぱり若い人たちの応援をするという立場に自分もなっていかなければいけないということを実感しましたね。

実際その子育てを始めてみると、これは20年前だったらとても大変だっただろうけれども、いろんなところに今配慮がなされているんだと。既にいろんなことが実現しているんだなというふうな、そういういろんな感謝の気持ちというの芽生えました。文句を言っているばかりでもなくて、やっぱりどういうふうに変化してきたか、その延長線上に今ある資源を使ってどういうふうによくしていけるかという、ちょっと僕の場合は現実的な視点も必要なというふうを考えています。

やっぱり子供もできましたので教育のことを改めて考えてみたんですが、自分自身、日ごろ大学という現場に身を置いているので、どういうふうに育っていったらどんな大学生になっていくのかなということを常に想像するんですけども、やっぱりその市井の人のレベルになるとどうしても先ほどおっしゃった、ちょっと奴隷みたいになりがちかなというのをすごく感じるんです。大学生でも「あなたはどう考えているの」と聞くと、大体黙ってしまう。やっぱりそれは従来の教育、日本の教育が悪いと、そういうふうに導いているというか、余り自分から、自ら発信するという方向に持っていけないのかなというふうな、ちょっと疑問は感じていて、やっぱり教育の現場にある人のいろんな意味でのプライドがもっと高まるような方向に行ってほしいなと思うんですね。そういうことを、やっぱり文化とか歴史とかというのを俯瞰的に見ることによって見えてくるのかなと思うんです。

だから、かなり内容はダブるんですけども、だから先ほど見せていただいたFuture Scope、あれも過去と未来とのその間に自分がいるという視点を、どうしても世の中は変化がすごく激しいので見失っちゃいがちなんですね。だから、その辺を教育の世界で考えられる人材をぜひ伸ばしていきたいなと思っているんです。そのためにやっぱりインフラを伸ばし、経済を伸ばし、本当にお金がないと何もできないというのも事実なので、その基盤をぜひこれからつくっていったら、そういった地道な積み重ねが未来の東京をきっと豊かなものにすると僕は思っています。

**【小池知事】**      ありがとうございます。

（西田様の方を向きながら）じゃあ西田さん、キンメダイ。

**【西田圭志様】**      昨年、東京宝島プロジェクトとあって、伊豆・小笠原諸島の魅力、宝物を見つけて、それを発信していこうというプロジェクトがありまして、それに僕も三宅島のメンバーの一人として参加させていただいたんですけど、そこで伊豆・小笠原諸島の

魅力を再確認できたんですけど、そういった魅力をもっといろんな人にもっと簡単にアクセスできるような未来が実現したらなと思います。

観光分野に次いで宝物として挙げられていたのが、農作物とか水産物の特産品だったんですよね。この冊子にもあったように、IT化やスマート化によって、効率化ももちろんそうなんですけど、漁業に関しては取り過ぎたらいなくなるという水産資源の特徴もありますので、市場の需要に合わせて魚が欲しいときにたくさん取って、要らないときは取り控えるという、そういった情報がすぐ入ってくるようなところに技術を使えたらなと思います。

東京オリンピックでも選手村で提供される水産物について持続可能性に配慮した調達基準というのが定められていて、東京オリンピックを通して、いろんな人に水産物とかの持続可能性について興味を持ってもらえたらなと思います。

**【小池知事】**      ありがとうございます。西田君。

島へ行ってください。彼の勇壮な姿を見てもらえれば。ありがとうございます。

アブディンさん、もう一回行こうか。

**【モハメド・オマル・アブディン様】**      ああ、すみません。いろいろ言われてしまったこともありますけれども、私は発表のときにもそうだったんですけども、人づくりというところですかね。まあ、人づくりという言葉もちょっと厚かましい言葉だと思いますけれども、やっぱり私はいろんな人と接していて、皆はものすごい力を持っていて、それを顕在化あるいは爆発化する教育環境がないというのが非常に問題であって、もっと東京の人が気楽に会話できる環境がすごく重要なと思うんですね。これは対話というのかな。その、場づくり、ハードの面でもハードの面でもこの場づくりがものすごく重要なと思うんですね。

気楽に語らえる環境があれば、みんなの胸の内にしまっている宝に出会えるのに。たとえば、電車による移動時間の長さを考えてみましょう。今朝、ここまでに2時間ぐらい移動してきていますが、だれとも一言を交わさずに来ました。やはり寂しいといえますか、もったいないといえますか。もちろんそっとしておいてほしい方がいてもよいですが。

【小池知事】 2時間もかけて来ていただいてありがとうございます。

じゃあ、高校生内閣もいつの間にか大学生になっちゃったのね。はい、どちらかからどうぞ。

【大内尚樹様】 じゃあ、まず私から。

私が思い描く未来の東京の理想は、自由に挑戦できる環境がある東京がいいと思っています。私自身、この1年間あいた期間の中ですごいろいろなことがあって、ちょっと将来の夢が変わったりだとか、それに伴ってやっぱり大学で勉強していることが、ちょっとこれは違うかもしれないなと思ったときに、それを考える時間がなかなか大学生活の中でなくて、それをちょっと違う道に変更したいと周りに相談しても、もう一つ、大学、ここに行く決めて中で変えるというのが、これ本当に変えても大丈夫なの？みたいな、ちょっと周りからの、それが本当に正しいことなのか、みたいなのを結構言われたりすることがあって。でもやっぱり一つの夢に向かって努力している途中にも、将来の夢とか学びたいこととか知りたいことが途中で変わることは結構よくあることなので、いろんな分かれ道を歩いていきたいと思っている人をサポートできるような周りの意識とか空気であったり、そういうのがもうちょっと欲しいかなと思います。

あとは、やっぱり皆さんのお話の中にクリエイティビティだったりそういうお話があって、有名なせりふなんですけど「過去が現在に影響を与えるように、未来も現在に影響を与える」という言葉があって、やっぱり過去ももちろん今の自分たちにすごい影響を与えて、こうしよう、ああしよう、前はああだったからああならないようにとか改善できたり、あとは、未来を創造して絶対こうなったらいいなという思いがこの未来の東京の論点の中にあったり、東京未来ビジョン懇談会の中で皆さんの欲望というか夢というかの中で、すごいわくわくするようなものがいっぱいあるので、その中でやっぱり欠かせないのがAIとかITとかロボットの話がもう必須になってきていて、この論点の中にもいっぱいAI関連のもが出ていますけれども、私たち人間ができることというのがもう今の時期こそ重要だと思っています。私の高校の恩師に言われたことで、この時代、未来を生き抜いていく中で人間にできることが三つあるというのを教わって。クリエイティビティ、ホスピタリティ、マネジメントのこの三つの分野がとても大事になってくるというのを教わって、人間のクリエイティビティの源になっているのが願望とか欲望とかそういう、未来こうなったらいいな、あんなこといいな、こんなことできたらいいな、みたいなそういうわ

くわくした面とかがクリエイティビティの源になっていると思うので、そこをもっと伸ばしていけるように、さっき言った、挑戦できる自由というのをもっとつくっていったらなと思っています。その中で忘れていけないのは、その夢を実現するために少しでも行動を起こしてみることに。それができるのはロボットじゃなくて人だけなので、簡単なのは皆さんの、都民の皆さんとかが想像した夢や希望の声を少しでもこの東京未来ビジョン懇談会とか、こういう機会に届けることだとすごい思っていて、それができる今の時代にこれをどんどんまた未来に発展させていけばいいのかなと思っています。

以上です。

【小池知事】      ありがとうございます。

(浜田様を指しながら) はい。

【浜田愛音様】      私も今、大学生なので、大学生としての切り口でちょっと話したいなと思うんですけど。私、今、法律の勉強をしていて将来は弁護士になりたいなと思っていて、ただ、大学でも趣味といいますかサークル活動でいろいろ音楽とかそういうバンドサークルとかに入っていて自分の趣味だったりとかもやっているんですね。4年間それは続けることはできますけど、その後は仕事が忙しくてできなくなってしまうというのが、私はすごい残念だなと思っていて、私の場合は音楽ですけれども、ほかの周りの子はダンスだったりとかアートだったりとかそういういろんな自分の好きな、スポーツもそうですけど、自分の好きな趣味だったりとかそういうのを、例えば体育会の子とかはもう本当にスポーツを頑張っているけれども、本当にその仕事とかの面、就職とかを考えたらそれをやめてしまわないといけない状況になってしまうというのが非常に残念だなと思っていて、私は将来二つの職業を持ってもいいのではないかなと思っていて、別に一つに縛られる必要は、もちろんその本職というのをちゃんと置いてそこでちゃんと仕事しなければならぬとは思いますが、もう一つ、二つ目の仕事があってもいいのではないかなと思います。

先ほど皆様のお話に出ていたように、これからクリエイティブなシティをつくっていかなければならない、つくっていくことになるという中で、だからこそそういう二つ職業を持つことが実現していくのではないかなと思っています。

なので、私の場合、弁護士と、それと音楽活動を二つ両輪で活躍していけたらなという

私なりの願望、周りの大学生もどっちもやりたいけど難しいよねとか、親からこう言われるから普通に就職しなきゃいけないのかなというのも完全になくなるような東京の未来が見えたら、私は大学生としても若者としてもすごい希望が持てる未来になって、より日本も豊かになっていくのではないのかなとすごく思います。

以上です。

【小池知事】      ありがとうございます。

こうやって久しぶりに皆顔を合わせて、またこの間いろいろと新しい考えや、これまでの考え方にさらに肉づけされたりということでお話いただきました。今年の末に今日、ここで御紹介した未来の論点、というのをビジョンの形にして、そしてまた、さらに肉づけしながら2040年を目途とした2030年までにすべきこと、というのをまとめていきたいというふうに思っていますので、またいつでも皆さんの御意見をお寄せいただければと思います。

一言で言うと、東京は自分のやりたいことができる、そういうチャレンジができるという素地があって、そしてそこで夢がかなう、そこはもう自分の努力とかいろいろみずからの切磋琢磨とかありますけれども、そういう舞台が提供できる東京であるべきだなと。そして、おっしゃっていただいたように人が中心で、そしてまた経済をこれからも持続可能にしていかななくてはならないけれども、そこはまた皆新しい人が考えることをベースにして、そして100歳まで皆生きるんですから、この今の御時世は。なのでたっぷり時間は特に皆さんありますから、チャレンジし続けていただきたいと思っています。

これまでこのビジョ懇でお話しいただいてきたこの夢を少しでも実現できるような、そんな東京にしていきたいと思っていますので、またこれからもよろしく願いいたします。まずは、今日わざわざお越しいただいたことに感謝申し上げたいと思います。ありがとうございました。

【政策企画局】      それでは、以上をもちまして意見交換を終了させていただきたいと思  
います。

— 了 —